

海に泛ぶ (王守仁)

陰夷原不滯胸中 何異浮雲過太空
夜静海濤三萬里 月明飛錫下天風

解説 この詩は、劉瑾にくまれて貴州竜場の馭丞に左遷されたとき
の作。

陰夷 原 胸中に 滯らず

語釈 ※陰夷 艱險 (けわしいこと) と平夷 (たいかなこと)。こ
こは逆境と順境とにたとえた。※原 ともとも。元來。

何ぞ 異ならん 浮雲の 太空を 過ぐるに

※不滯胸中 胸中は心の中。心の中につかえない。すなわち全く問
題にならないこと。※何異 反語で、なにもかわらない。※海濤 濤
は大きなみ。海のみ。※飛錫 錫杖 (道士や僧侶などが使う
杖)。僧侶が巡遊することをいう。※天風 天の風。空を吹く風。

夜は 静かなり 海濤 三万里

通釈 世の中の逆境とか順境とかは、もともともともいって、

月明 錫を 飛ばして 天風に 下る

心の中につかえるものは何もない。ちようど空に浮いている雲が自
然に大空を過り過ぎてゆくのと同じことである。夜は今幸い静かだ
ある。この果てしなく広がる大海原を、月の明るく照っている中に、
ちようど錫杖について空吹く風を御して天下るように出発するので
ある。